

MECCだより

武蔵野・多摩環境カウンセラー協議会広報紙 第30号 2012年11月

もくじ

巻頭言・「尾瀬の未来は？」	藤野 良洋
MECCバス視察・研修会 ～環境保全と生物多様性の探究～	若林 高子
水辺を楽しむー江東区内部河川の小名木川でのハゼ釣り	井田 秀明
エコアクション21の普及活動（その1）	倉光 康夫
新会員紹介	庄司 一也
【イベント紹介】講演と避難者の話を聞く会(12月1日)	末光 正忠



10月初旬の尾瀬

巻頭言・「尾瀬の未来は？」

藤野 良洋

日本には各地に大なり小なりの湿原が数多く存在しますが、長いスパンで考えるとやがては消滅する運命にあります。原因は、気候変動、ササ類や樹木の進出、雪解け・降雨・歩行者の踏みつけによる土砂流入等の影響が考えられます。

「尾瀬」に眼を向けると、その一部は水利権を東京電力が所有する私有地です。先般の株主総会でも発電事業以外は全て売却または放出することが決議されていますので、近い将来、国その他に売却または寄付されると思われます。はやくも地元では、外国資本が買収意向を示している事実があります。国が経済的利益を生まない民有地を買収する場合は、道路等以外は新たな法制度と予算措置が必要です。現在維持管理費は、そのほとんどが東京電力の負担となっていますが、株主の理解は得にくい状況です。

「国が放置するわけは無いから心配無し」との意見もありますが、大いに疑問です。受け皿は、群馬県・福島県・新潟県と東京電力で設立された（財）尾瀬保護財団が考えられますが、東京電力がこの財団の理事を辞任するので、財団の運営資金もこの先不透明です。

このような中、今年は入口の一つである「大清水」地域の水芭蕉や高山植物が全滅しました。原因は、500頭と推定されているシカが植物を食べてしまうことと、このシカの「ぬた場」になったためと考えられます。シカが、身体についての害虫を取り除くために湿原で転げ回るのです。

シカを駆除するにも国立公園法、鳥獣保護法等の法制度により、湿原内に立ち入ることは不可能です。また、登山客の安全確保のため、夜行性のシカの夜間駆除ができません。何よりも猟師の高齢化でマンパワーそのものが不足しています。環境省が3年計画で取り組みましたが、成果は上がっていません。現時点では湿原域全周を電気柵で封鎖し、見つけ次第射殺するしかありません。一方、日光の戦場ヶ原ではあつと言う間に固有種ニッコウシラネアオイが食害で全滅し、現在回復努力が続けられていますが、回復にはあと10年以上はかかるでしょう。気がついた時は手遅れです。

本当に尾瀬を日本人の遺産として残すなら我々も含めた環境カウンセラーがマンパワーを提供するしか方策はないのではないかと、とも思う今日この頃です。

MECC バス視察・研修会 ～環境保全と生物多様性の探究～

若林 高子

8月4日(土)、茨城県・霞ヶ浦周辺をめぐる上記バスツアーに総勢17名で参加した。

東端の土浦市にある①霞ヶ浦環境科学センターを見学したのち、②水資源機構霞ヶ浦導水場入口を見て、ほぼ真ん中にある霞ヶ浦大橋を渡り③霞ヶ浦ふれあいランド水の科学館へ。昼食後、ふたたび大橋を渡って④かすみがうら市郷土資料館、⑤歩崎^{あゆみざき}観音(長禅寺)、⑥茨城県産野菜販売所立ち寄り。

琵琶湖に次ぐ広大な霞ヶ浦について初めて知る機会だったが、個々の施設について紹介する紙数がないので、大まかな印象と感想のみとさせていただきます。

平成7年つくば市・土浦市で開催された第6回世界湖沼会議を機に、10年後に開所した霞ヶ浦環境科学センターは水質環境保全を中心に調査研究に取り組む総合的な拠点施設。フロアには明治時代に陸軍が作成した「霞ヶ浦の迅速測図原図」が広がり、足下の測量図の上に立って当時の状況を確認。当時と現在での地形の変化などを見た後、舟運の盛んだった江戸時代、現代のかかえる問題点等の展示を見てまわる。

その後、(社)霞ヶ浦市民協会研究顧問の沼澤篤先生(筑波大学特任教授・理博・環境カウンセラー)が解説者として乗車され、バス内で詳しく説明を受けた。



歩崎観音展望台(茨城百景の一つ)から霞ヶ浦を望む、
左手がコイの養殖場

霞ヶ浦は琵琶湖に次ぐ第二の大きさだが、水深が約4mと浅く、まるでスープ皿のような湖で、56本もの河川水が流入し、東京ドーム685杯分の水量があるとのこと。昔は海だったが次第に汽水湖となり、現在は農業振興のために閉め切られた淡水湖である。コメ余りから収益率の高いレンコンへの転換が成功し、生産高は日本一。養豚、養鯉も盛んで、農業・漁業との関わりが深く、さらに周辺の都市化による人口急増で水質が悪化、アオコが発生するなど水質汚染は深刻のようで、改善への取り組みが進められている。

かすみがうら市郷土資料館には、凧あげの原理を応用して、折本良平が独自に発明した帆引き船の3分の1の模型が展示され、その見事な姿に圧倒される(残念ながら撮影禁止)。往時は霞ヶ浦を埋めつくすほどの帆引き船が活躍したそうだが今は観光のみという。近くの歩崎観音は、霞ヶ浦で難破しかけた船を水上を歩いて助けた観音に由来し、舟の安全祈願の信仰を集めており、境内には折本良平の碑がある。

生活排水のほか、畜産系(養豚は全国5位)、水産系、工場・事業系などが流入、下水道の整備が遅れていることなど課題は多いが、豊かな自然の恵みの多い、住みやすい所だそうで、茨城県と霞ヶ浦を知る良い機会であった。

最後にこの企画を推進された糸井理事長他、お世話された方々に厚く御礼申し上げます。



ハス田

水辺を楽しむー江東区内部河川の小名木川でのハゼ釣り

井田 秀明

MECC及び神田川ネットワークが主催する「東京の水辺の憩い・触れ合い空間の創出を目的」とした基礎調査として江東区の小名木川クローバー橋でのハゼ釣り調査が8月22日(水)と9月1日(土)の2回開催され、その2回目に参加しましたので報告します。

高尾の早朝は雷鳴を伴う激しい雨でしたが、最寄駅の住吉駅を出ると残暑の日差しがまぶしいものでした。

小名木川クローバー橋はハゼ釣りの名所で、小名木川と横十間川の交差する場所にクロス状に掛けられた珍しい形の歩道橋です。小名木川は荒川と隅田川に挟まれたゼロメートル地帯にあり、水門によって隣接する河川から遮断し、水位を海拔マイナス1メートルに管理しています。川の両岸は臨水公園として遊歩道が整備され、散歩する人、釣り糸を垂れる人が見受けられます。スカイツリーはほぼ真北2キロにあって、横十間川にスマートな姿を映していました。

水面は非常に静かで、浅い所ではハゼや回遊する小魚が良く見えます。釣り人は2メートル位の竿で岸边を覗き込みながら釣っていて、バケツには十数匹の釣果も見られ、これからの釣りに期待が持てました。

前日に購入したハゼ釣りセットを組立て、指導を受けて餌を投入。錘が川底に着いたら竿を上下して誘ってみるとプルプルッと軽い当たりを感じ、合わせると7～10センチ位のハゼが上がりました。連続で釣れる時と当たりのない時があり、ハゼは大食いのように、やや大きな餌の方が良く喰いつきました。釣果は糸井さん、渥美さん、私の3人で約50匹。小さなハゼは魚籠の網目から逃げてしまいました。途中、どしゃ降りに見舞われクローバー橋の下で雨宿りするハプニングもありましたが、楽しく満足の一日を過ごすことが出来ました。



水面を見つめて当たりを待つ

エコアクション21の普及活動(その1)

倉光 康夫

当武蔵野・多摩環境カウンセラー協議会には環境カウンセラーの事業者部門に登録している人が約40名おり、いつでも事業者様の様々な相談を受付けております。

その中で環境省が推進する環境マネジメントシステムであるエコアクション21を推進していくため、審査人が約20名在籍しており、エコアクション21のほとんどの業種に対応しています。

多摩地区では自治体と協力して、エコアクション21の普及・導入に努めています。本年度は八王子市、町田市、昭島市でのエコアクション21導入セミナー・研修会の講師やアドバイザーを担当しております。

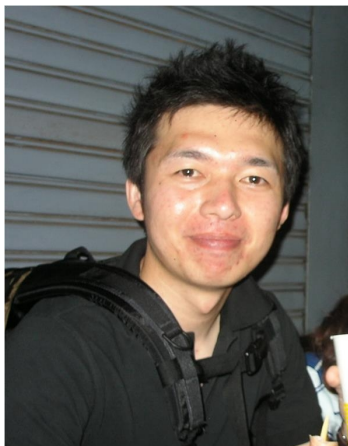
審査活動は主として東京周辺の事業者を対象としております。エコアクション21の活動は事業者様に自ら実施・運用して環境を改善していただくのですが、私たちはアドバイス活動、審査活動を通じて、事業者様の環境改善活動に効果があがり、事業活動にも役立つよう積極的にお手伝いをしています。また、当協議会はエコアクション21地域事務局東京中央の支援団体となって、活動しています。

今回はエコアクション21について説明いたします。



新会員紹介

しょうじ かずや
〈庄司 一也さん〉



1979年水戸市生まれ、専門分野「会社法」「e-ラーニング」。社会科学系大学院卒業後、大学職員、助手、専門学校教員を経て現在に至っております。

本協会との出会いは、7月に行われた「環境教育インストラ

クター養成セミナー」です。そこで環境教育の大切さと面白さを知り、また糸井理事長のお話に興味関心を持ち、ぜひ糸井理事長の「武蔵野・多摩環境カウンセラー協議会」に入会したいと思います。「環境」に関しては大学院時代より「コーポレート・ガバナンスの研究」の中で、CSR、すなわち企業の社会的責任として「いかに環境に配慮しそれを経営にどのようにつなげていくか」を探究しております。それ以外は知らないことが多く、いわば“環境1年生”といったところですが。どうぞ皆さま、ご指導よろしくお願いいたします。

講演と避難者の話を聞く会(12月1日)

MeC西東京代表 末光 正忠

講演：「東日本大震災からの復興—福島第一原発事故—避難の諸相と復興への道すじ」

日時：12月1日(土) 午後1:30～4:30

会場：柳沢公民館

(西東京市柳沢1-15-1 電話042-464-8211
西武新宿線西武柳沢駅南口徒歩2分)



講師1：山下祐介(首都大学東京都市教養部社会学准教授)

講師2：出戸達雄(福島県川内村からの避難生活者)

主催：MeC 西東京(西東京市公民館市民企画事業)

2011年3月に発生した福島第一原発事故。講師1の山下祐介准教授から避難者への社会学調査を通じて、避難の実態、また現在人々がおかれている状況、今後の見通しなどについて講演されます。講師2の出戸達雄氏は、現在佐渡市で避難生活をしており、高齢者を2人抱えて、福島県川内村→会津若松市→佐渡島と避難した体験から復興の道筋について語ります。原発避難に関しては、徐々に関心も薄れている現実がありますが、事故の影響は人々を時間が経つにつれよりいっそう蝕んでいます。「帰れない」のに「帰らざるを得ない」人々、「帰りたい」のに「帰るわけにいかない」人々。避難者の間では、世代、性別、職業などの間で様々な断絶も起きており、コミュニティの再建は容易ではありません。それでも回復の動きも見え、希望ある復興を考え、私たちに何ができるかを問いかけます。

発行者：NPO 武蔵野多摩環境カウンセラー協議会 (MECC) 事務局
180-0003 武蔵野市吉祥寺南町3-31-16 糸井守
TEL：0422-45-0352 FAX：0422-45-0353
ホームページ：http://www.mecc.or.jp/
編集者：中西由美子